

# ウガンダ南西部の人口稠密地域における斜面農耕と土地利用に関する研究

平成 26 年入学  
派遣先国：ウガンダ共和国  
堀 光順

キーワード：土地利用， 斜面農耕， 在来農業， 人口問題

## 対象とする問題の概要

ウガンダでは急速に人口が増加している。2002 年の人口は 2400 万人であり、1992 年から 2002 年までの人口増加率は年率 3.2%であった。この人口増加率は、23 年で人口が倍増する驚異的なペースである。2002 年の時点で、ウガンダの全人口に占める農村部に居住する人口の割合は約 88%であり、農村人口が急速に増加していることが分かる。人口の急速な増加は、1 人あたりの農地面積の狭小化と作物生産の減少をすすめ、食料不足が発生することも懸念される。

研究対象地域であるウガンダ南西部にはグレートリフトバレーが南北に走り、その標高は 1,220m から 2,350m の起伏がある高原地帯となっている。斜面地では土壌浸食の危険性が高く、地形に制約を受けて不規則な小区画が多くなることによって、農地のもつ生産条件が悪化するという危険性がある。

## 研究目的

本研究の目的は、ウガンダ南西部の高地における在来農業を調査することによって、農耕民チガの人びとによる斜面地の利用および、土地所有の形態を明らかにすることである。調査の対象地域はカバレ県である。県の人口密度は 1 km<sup>2</sup> あたり 275 人であり、人口密度が高い地域である。このように急斜面の多い高原地域でありながら、人口が密集しており、山地斜面を利用した農業が営まれている。農地として利用できる土地が限られているため、集約的な農業を営む必要がある。本研究では、傾斜地でチガの人々がどのような農耕を営んでいるのか、人口稠密地域における土地利用について明らかにする。

## フィールドワークから得られた知見について

2015 年 6 月 11 日から 9 月 1 日までの 90 日間にわたり、カバレ県の農村 R 村(標高 1950~2300m)にて現地調査を実施した。カバレ県は赤道直下に位置しており、気温の年較差が小さい。一年を通して降雨がみられるため、雨季と乾季の明瞭な差はみられないが、チガの人びとは 12 月から翌年 2 月までの第 1 雨季、3 月から 5 月までの第 2 雨季、9 月から 11 月までの第 3 雨季という 3 度の雨季と、6 月から 8 月までの乾季として区切っている。今回の調査期間は、乾季に相当する。調査地域において、畑で栽培されていた作物の履歴と土地所有者の氏名を調査した。

調査村では、自給作物であるソルガムやインゲンマメ、サツマイモと換金作物であるジャガイモを組み合わせた 2 年周期の営農形態がとられている。調査期間中では、主にソルガムとインゲンマメの栽培と収穫を観察することができた。ソルガムは降水量の多い第 1 雨季に、インゲンマメは降水量が少ない第 2 雨季に播種され、どちらも 8 月の乾季の終わりに収穫される。調査村では、斜面角度が 30° を超え

る急斜面上の耕作地も多いため、等高線に沿うかたちでテラス耕作がおこなわれている。

R村では、尾根や谷といった地形を境界線として、15地区に区分されている。村全体におけるインゲンマメとソルガムの栽培面積はそれぞれ、61.9haと58.4haで、ほぼ同じ値であった。しかし、地区ごとに栽培されている作物を検討すると、インゲンマメの栽培面積が多い地区(写真1)やソルガムの栽培面積が多い地区(写真2)といったように栽培される農作物の割合が偏っていた(図1)。

聞き取り調査から地区ごとに栽培作物をまとめる要因として、鳥害があげられた。ソルガムやインゲンマメは鳥害にあいやすい。鳥害を軽減させるために、ひとつの地区でまとまり、周囲の畑と同じ作物を栽培する傾向がある。

調査村の人びとは複数の地区に土地を所有しており、地区ごとに異なる農作物を栽培し、それぞれの農地で輪作をしていた。調査村では、1筆あたりの面積が小さいこと、そして上述の鳥害対策から、1筆の耕作地を分割して複数の作物を栽培することは難しい。各農家は異なる地区に農地を保有することによって、複数の作物を栽培することが可能である。

村内の地区ごとに異なる農作物を生産する営農形態は、人口増加にともなう農地不足や鳥害による被害対策から影響を強く受けていることが明らかになった。

### 今後の展開・反省点

今回の現地調査では、第1雨季と第2雨季、乾季にわたる約9ヶ月間の栽培作物に関するデータを取得することができた。今後は、第1雨季と同等の降水量のある第3雨季における土地利用のデータを取得し、通年にわたる農家の営農形態を明らかにする必要がある。

斜面地において地区別に土地を保有する営農形態では、能率的に作業をすすめることができず、生産性が限られる一方で、労働時間が長くなる傾向にある。今後、耕作に投入する農家の労働時間を調査し、生産力を高める取り組みや土地利用、土壌浸食への対応などを調査していきたい。

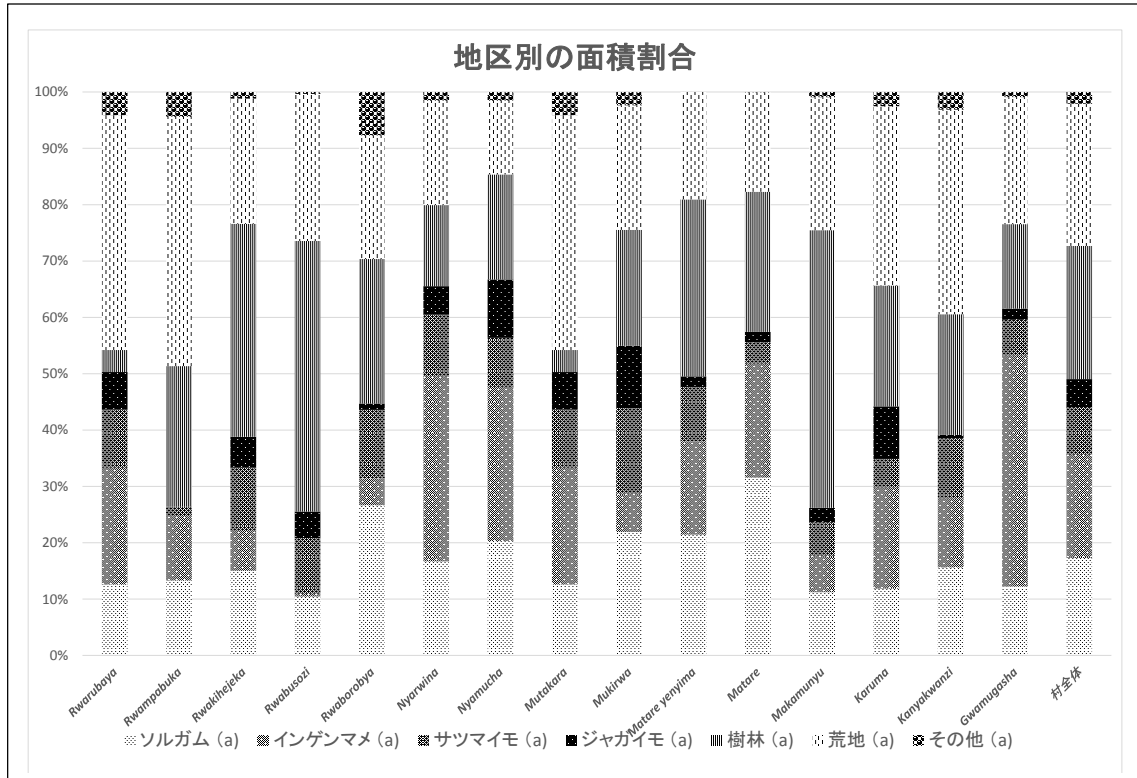


図1 地区別の栽培作物の面積割合



写真1 ソルガムが多く栽培される地区



写真2 インゲンマメが多く栽培される地区